

『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション—気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現』実践報告

佐藤有理、青木惣一、加藤陽子、千田昭予

【要旨】

本稿は、2024年7月に出版した『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション—気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現』をテキストとして用いた待遇表現教育の実践報告である。テキストの作成経緯は、[2024年度の年報で報告した](#)。本稿は、2024–2025年度のレギュラーコースにおいてテキストを実際に活用した教育実践にもとづき、学習段階別の実践例、受講した学生によるコース評価の分析、テキストを使用した教師の感想、今後の課題と展望の順で述べる。

【キーワード】

待遇表現、敬語コミュニケーション、学習段階別の実践例、コース評価

1 はじめに

2024年7月に出版した『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション—気持ちが伝わる中級からの日本語待遇表現』をテキストとして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、センターと略）は、[2024–2025年度のレギュラーコース](#)において、「待遇表現」の教育実践を行った。

テキストの作成経緯や使用方法、留意点は昨年の年報で報告した。本稿は、実際に本テキストを初めて活用した待遇表現教育の実践を踏まえて、学習段階別の実践例、受講した学生によるコース評価の分析、テキストを使用した教師の感想、という順で振り返ったうえで、今後の課題と展望を述べる¹。

2 学習段階別の実践例²

本テキストは、敬語形式の学習は終わっているが実際の場面での使用経験に乏しく運用力が十分でない段階から、実際に敬語を使用する環境にあるがさらに洗練された表現を求める段階の学習者までを想定している。そのため文型としては初級文型が学習済みであれば使用可能であるが、語彙や表現はかなり難しいものも含まれている。

IUCのカリキュラムでは、1日50分×2コマ、計100分の授業で1ユニット進むのが標準的であるため、学習者の知識・経験に応じて授業で扱う項目を選択して授業を進める必要が

ある。ここでは便宜的に学習者のレベルを①初級終了直後、②中級、③上級と分けて、ユニット7「お願いしたいことが 依頼する／依頼を断る・受ける」を例に、本テキストをどう扱ったかについて例をあげる。

2-1 初級終了直後

1) 想定される学習者の言語状況

敬語形式は学習済みであるがまだ定着していない。

2) 目標

テキストと同様の場面で「基本部分」（モデル会話）の流れと表現を使い、依頼したり適切に断ったりすることができる。

3) 進め方

まず本テキストの「B 基本部分を確認しよう」の「基本部分の流れと表現」「基本部分の重要なポイント」を確認し、モデル会話の「基本部分」が滑らかに言えるように練習した。この時、会話を読むのではなく、「A やってみよう」やp. 127（場面1）、p. 133（場面2）のように空欄のある会話文の各部分で必要な表現が出せるように練習した。この段階の学習者にはこの活動が中心となった。敬語形式の操作に慣れていない場合は、まず、本テキスト巻末の「敬語の基本：復習とまとめ」を参照してから始めた。

次に、この「基本部分」を応用し、「C 練習しよう」で簡単なやり取りを練習した。ただし、本ユニットでは依頼をする／断る相手が「先生」「知り合い」「友人」など幅広く設定されているため、表現の選択に戸惑う学習者もいた。その場合は会話相手を目上の人間にしほり、モデル会話に近い形で練習するとスムーズに進んだ。

最後に「まとめの練習」の1の会話の空欄補充の練習により、本ユニットで学習したことを見た。最後に「メールを書いてみよう」はメールの流れと表現を確認し、モデル文と類似した文脈のメールを書くことで学習したことの定着を図った。

2-2 中級

1) 想定される学習者の言語状況

敬語形式の操作は円滑にできるが敬語を使ったコミュニケーションの経験が少なく、語彙や表現の幅がまだ狭い。

2) 目標

相手や場面に合わせて適切に依頼したり依頼を断ったりすることができる。

3) 進め方

「B 基本部分を確認しよう」でモデル会話の再生から始め、会話を読まなくても流れを見ただけで表現がすらすら出てくるかどうかを確認した。

次に「C 練習しよう」へと進み、簡易版ロールプレイとして練習した。「基本の表現と

ていねい度」から表現を選び、相手によって丁寧さを調整してみるよう促した。授業活動の中心はここにおいた。

「D 聞いてみよう」は多様なインプットを得るためにいくつか選んでペアで読ませ、場面や表現のバリエーションに触れさせた。

「まとめの練習」の1（会話の空欄補充）、「メールを書いてみよう」は前節同様、学習したことの復習および定着を図るために扱った。

2-3 上級

1) 想定される学習者の言語状況

学校や職場で敬語使用の経験があり、ある程度慣れている。

2) 目標

さらに洗練された表現を習得し、必要な時に必要な表現が使える。

3) 進め方

この段階の学習者は「B 基本部分を確認しよう」まで予習させた上で「C 練習しよう」で重要な表現が使えるかどうか、また相手や場面によって敬語レベルを調整することができるかどうかを確認することから始めることが可能である。

「D 聞いてみよう」は実際の文脈でどのような表現が用いられるかを知るために学習者の関心や必要性に応じてペアで読ませた。

授業活動の中心となったのは「まとめの練習」の2（ロールプレイ）である。この練習を通して自分の意図を言語で実現するために相手や場面に応じて表現や敬語レベルを調整することができるかどうかを確認した。

「Let's Challenge!」（間違い探し）はどのような誤用であるかをあらかじめ提示しないと難しい場合もあったが、自分が経験した誤りが含まれている可能性があるため、自分の日本語使用についての内省を促す活動にもなった。

「まとめの練習」の1「メールを書いてみよう」は前節同様、学習したことの復習および定着を図るために扱った。メールの練習においては、会話の表現と書き言葉の違いについても十分意識させ、より洗練された表現が使えるようになるよう留意した。

2-4 まとめ

以上をまとめると、表1のようになる。実際には学習者の知識や経験に応じてさらに細かく項目を取捨選択して進めていったが、学習段階が進むにつれて教室における活動内容の中心がユニットの後半へと移っていった。

表1 レベル別使用例のまとめ

テキストの項目	初級終了直後	中級	上級
A やってみよう	予習段階で使用		
B 基本部分を確認しよう	◎	○	
C 練習しよう	○	◎	○
D 聞いてみよう		○	○
メールを書いてみよう	○	○	○
まとめの練習の1（会話の空欄補充）	○	○	○
まとめの練習の2（ロールプレイ）			◎
Let's Challenge!（間違い探し）			○

○：授業で扱うもの（一部予習あるいは復習課題とするものもあり）

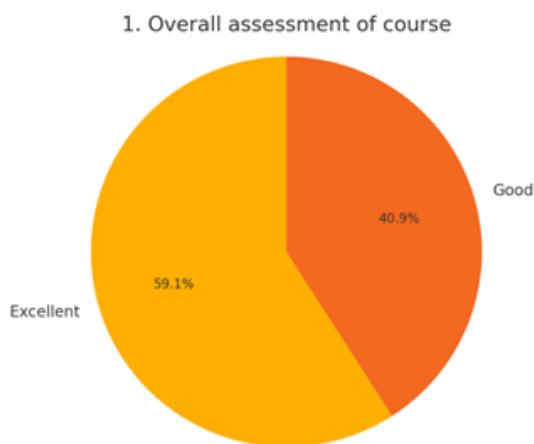
◎：授業活動の中心

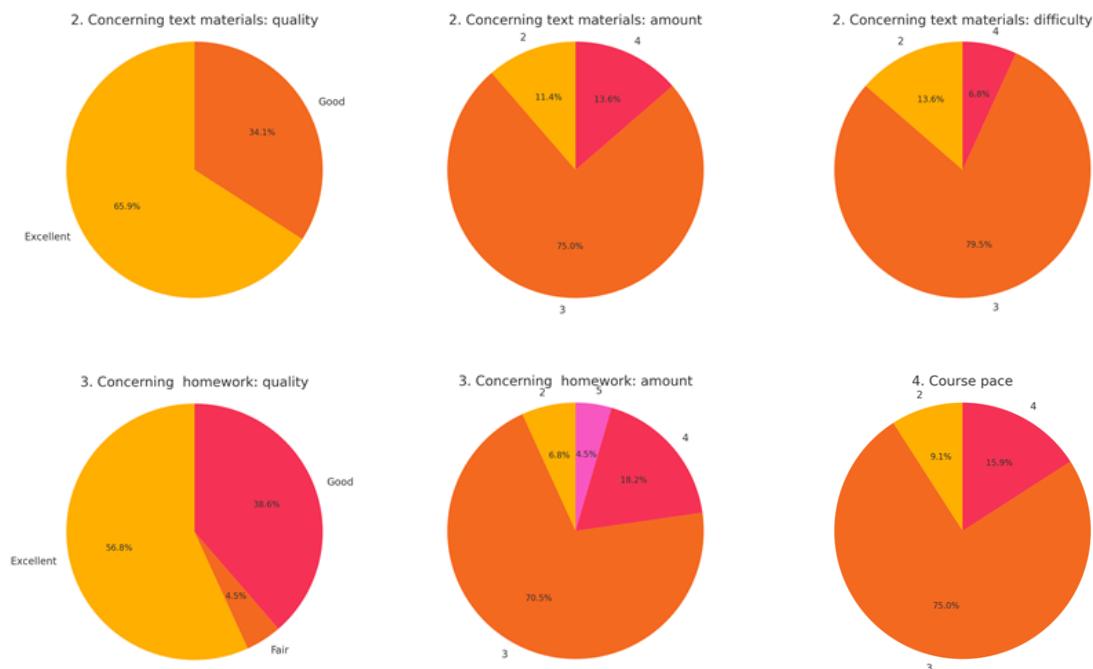
3 受講した学生によるコース評価の分析

本章では、2024–25年度に『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』をテキストとして初めて用いた「待遇表現」のコース評価の結果を分析する。このコース評価はセンターの各コース終了時に学生全員に対して行っており、本年度については学生55名中44名が回答（回答率80%）した³。

3-1 2024–25年度コース評価結果

コース評価の概要は以下の通りである。





全体評価（Overall assessment）については、Excellentの割合が59.1%となっており、総じて高評価と言える。他の必修コースの評価と比較しても高めの割合となっている。

教材の質についてはExcellentの割合が65.9%と高い値となっており、教材の量と難しさも適度と答えた割合が7割を超えていたことからも、教材そのものについての評価は概ねよいと言える。

一方、宿題（準備）については、Excellentの割合が5割を超えている（56.8%）ものの、Fairとの回答も見られ、また、量については「やや多い」と「多い」の割合が併せて22.7%を数えていること、コースペースについて「やや早め」が15.9%いたことなどから、各クラスの能力に合わせた宿題やスケジュールを今後も検討していく必要があるように思われる。

コース評価に見られた学生のコメントを大きくまとめると、以下のようになる。

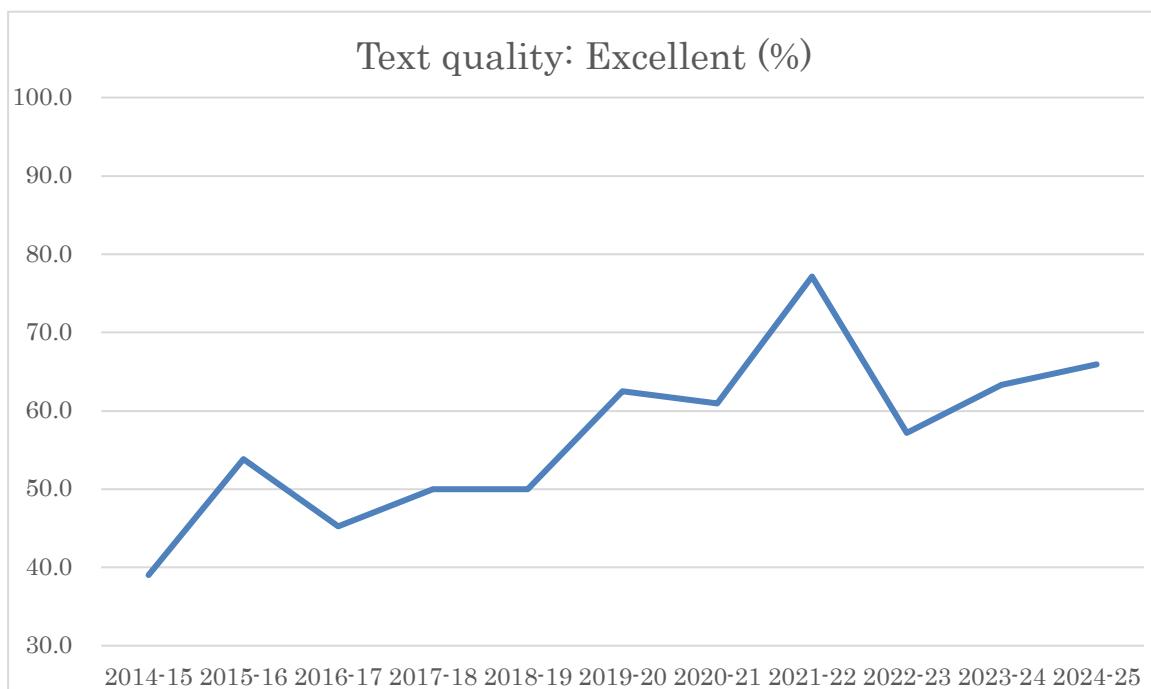
- 1) 教材そのものはよくまとまっており、会話の流れやスタイルの違いが説明されていてわかりやすい。メールもとても役に立つ。
- 2) 授業は定型表現の暗記に力点が置かれていたが、様々な場面で「即興」的に行う練習を多くしたい。また、学生が動画を作成するなどして、暗記した表現の再生練習に止まらない参加型アクティビティーがしたい。
- 3) 文法復習終了後に待遇表現をまとめて実施するクラスと、曜日によって文法復習と待遇表現を分け、同時に実施するクラスとがあったが、学生の学習スタイル等によってどちらがよいか評価が分かれた。

3-2 「待遇表現」コース評価の経年分析

ここでは、毎年行っている「待遇表現」のコース評価の2014–15年度から2024–25年度までのデータを用い、特にOverall assessmentとText materials: qualityの結果を経年的に見ることで、「待遇表現」の教材開発を評価することにする。

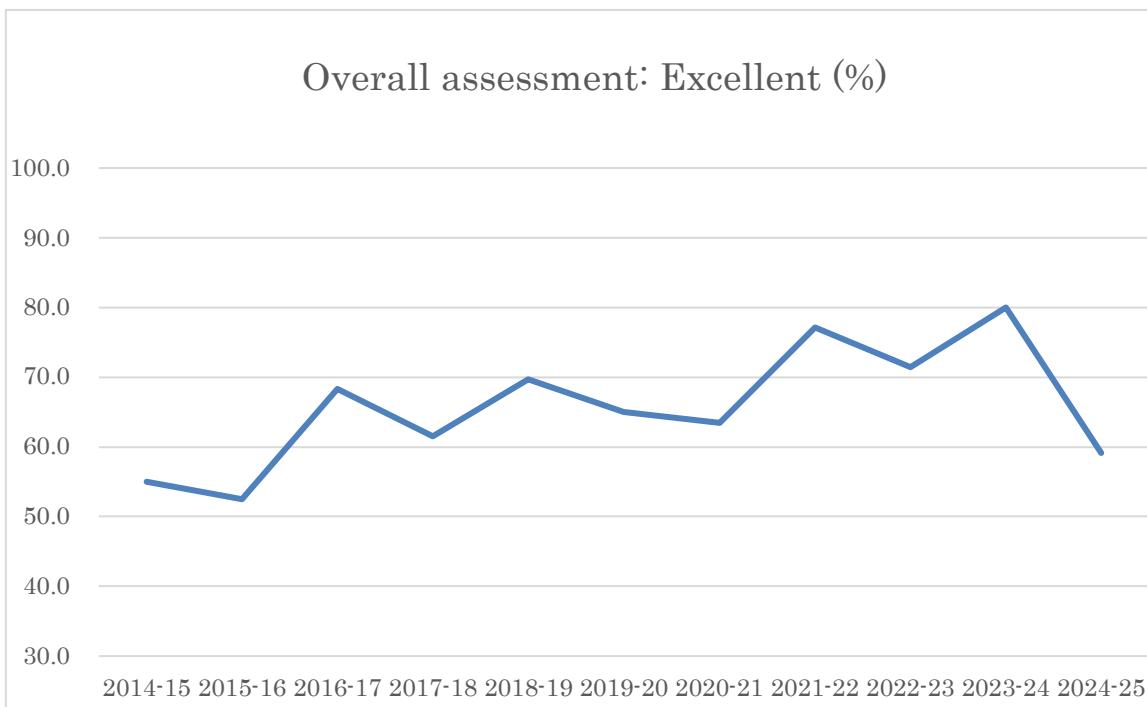
「待遇表現」コースは、2014–15年度から2018–19年度までは「旧待遇表現」（『待遇表現：Formal Expressions for Japanese Interaction』(The Japan Times)）を使用し、2019–20年度から2023–24年度までは新たに作成された「新待遇表現」を使用、2024–25年度には、この「新待遇表現」を新たに編集し直して書籍化した『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を用いた。また、この間、2020–2021年度、2021–22年度、2022–23年度はコロナ禍によりオンラインによる実施となった。

まずText materials: qualityの割合を取り上げる。「旧待遇表現」を使用していた2018–19年度までと比較すると、「新待遇表現」を用いた2019–20年度以降でExcellentの割合が増加し、評価が高くなっていることが認められる⁴。『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を用いた2024–25年度についても、前年度と比べてわずかであるが評価が高まっており、「新待遇表現」の作成、及びそれを『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』として書籍化したことは、テキストの質を向上させるのに役立ったと言えるであろう。



Text quality	14-15	15-16	16-17	17-18	18-19	19-20	20-21	21-22	22-23	23-24	24-25
Excellent(%)	39.0	53.8	45.2	50.0	50.0	62.5	61.0	77.1	57.1	63.3	65.9
Good(%)	58.5	35.9	47.6	39.5	39.7	35.0	36.6	17.1	30.6	33.3	34.1
Fair(%)	2.4	10.3	7.1	10.5	10.3	2.5	2.4	5.7	12.2	3.3	0.0
Poor(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
回答総数	40	40	41	39	33	40	41	35	49	30	44
回収率(%)	71.4	71.4	91.1	60.0	58.9	67.8	74.5	67.3	79.0	55.6	80.0

一方、待遇表現のOverall assessment（宿題や授業、スケジュールなどすべてを含む）についての評価を見ると、以下のようになる。



Overall assessment	14-15	15-16	16-17	17-18	18-19	19-20	20-21	21-22	22-23	23-24	24-25
Excellent(%)	55.0	52.5	68.3	61.5	69.7	65.0	63.4	77.1	71.4	80.0	59.1
Good(%)	45.0	42.5	29.3	38.5	24.2	30.0	36.6	17.1	24.5	16.7	40.9
Fair(%)	0.0	5.0	2.4	0.0	3.0	5.0	0.0	5.7	4.1	3.3	0.0
Poor(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
回答総数	40	40	41	39	33	40	41	35	49	30	44
回収率(%)	71.4	71.4	91.1	60.0	58.9	67.8	74.5	67.3	79.0	55.6	80.0

Overall assessmentについても、「旧待遇表現」から「新待遇表現」に変わり、評価はや

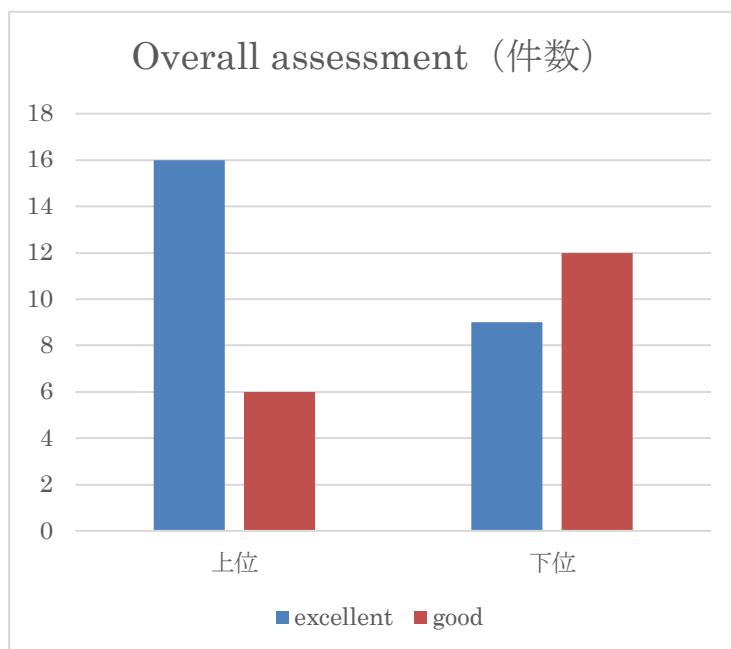
や高まったことが見て取れるが、『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を初めて使用した2024–25年度においては、評価が下がっていることがわかる。『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』は、「新待遇表現」の内容をほぼすべて含み、更に翻訳を付けるなど、内容を充実させたものであること、また、Text qualityの評価が上がっていること等を考え合わせると、書籍化がテキストの扱い方や授業の仕方に変化をもたらし、それが評価に繋がったのではないかと推測される。

3-3 学生の日本語の運用力と「待遇表現」コース評価との関係の分析

3-2で、テキスト自体の評価と、コース全体の評価にずれがあることを示し、それがクラスでのテキストの扱い方等による可能性があることを指摘した。ここでは、その点をより詳しくるために、学生の日本語の運用力のレベルによって、どのように結果が異なっているかを検討した。日本語の運用力によってクラス分けされた2024–25年度の全9クラスを、上位5クラスと下位4クラスにグループ分けし、先に分析したOverall assessmentとText quality、Course paceについてそれぞれグラフ化し、Overall assessmentとText qualityについてはクロス集計表を作成すると以下のような結果となる。

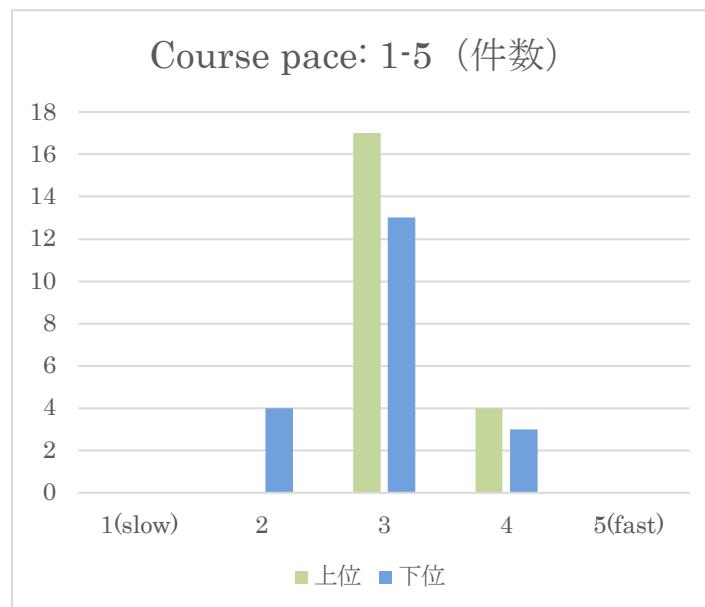
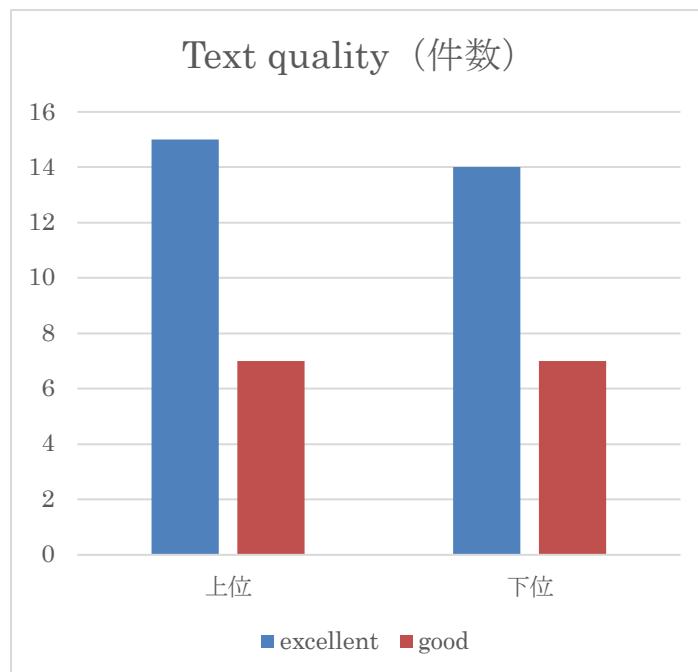
Overall assessment	上位	下位	合計
Excellent	16(12.8)	9(12.2)	25
Good	6(9.2)	12(8.8)	18
合計	22	21	43

()は期待値を示す。



Text quality	上位	下位	合計
Excellent	15(14.8)	14(14.2)	29
Good	7(7.2)	7(6.8)	14
合計	22	21	43

()は期待値を示す。



Text qualityの評価については、上位と下位で特に違いは見られなかった。一方、Overall

assessmentについては上位と下位で評価が大きく異なっており、上位においてのほうが評価が高いことが見て取れる。この点につきカイ二乗検定を行ったところ、 $p(1)=0.047<0.5$ であり、評価に関して有意水準5%で上位グループと下位グループで偏りがあることが明らかになった。

以上から、以下の分析が考えられる。

3-2でText qualityの評価が2024–25年度について上がったと述べたが、それは上位においても下位においてもほぼ同様の結果であり、テキスト自体の評価は学生の日本語運用力にかかわらず、概ね向上したと言える。

一方、Overall assessmentが2024–25年度において若干低下していることが3-2で示されたが、上位と下位のそれぞれについて見ると、上位ではExcellentの割合が高いのに対し、下位では若干Goodの割合の方が高くなっている、Overall assessmentの評価が厳しいのは下位グループにおいてであることがわかる。

その理由の可能性として、下位のクラスでは練習に十分な時間が取れない等が考えられるが、実際、Course paceについての評価は上位と下位で大きな差異が見られない。とすれば、単に練習時間やペースの問題だけではないように思われる。

学生コメントには、單なる定型文の暗記だけではなく、いろいろな場面でのロールプレイ練習がしたいとの声が多く見られ、そこから推測すると、下位のクラスではモデル会話を滑らかに言えるよう練習することが中心であるため、クラス作業での定型文再生練習の比重が多くなり、コース全体の満足度に違いが出ている可能性が考えられる。

また、本テキスト『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』の試用版に当たる、製本化されていない「新待遇表現」との比較で言えば、説明に英訳が加わったため、結果的にクラスでの説明の時間を練習に向けることができ、そのことが結果的にモデル会話の再生練習中心の授業となり、学生にとって単調に感じられたという可能性、あるいは、製本化されていない試用版ではクラスの日本語運用力に合わせてテキスト自体を編集して用いることができたが、製本化によってそれができなくなったため、下位のクラスで扱われない項目が顕在化し、そのことが学生の満足感に影響した可能性などが考えられる。

3-4 まとめ

以上、2024–25年度「待遇表現」コース評価結果から分かることをまとめる。

- 1) 2024–25年度についての評価は概ねよい。特にテキストの質についての評価は良好である。一方、宿題や準備等、クラス作業の準備については、その量や内容について、検討する余地が見られる。
- 2) 2024–25年度の結果を経年で見ると、「旧待遇表現」から「新待遇表現」、そしてそれを書籍化した『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』へと変化するにつれ、テキストの質に対する評価も高まっている。一方、準備や授業も含めた全体評価について

みると、「旧待遇表現」から「新待遇表現」への移行に伴い評価は高まったものの、書籍化によって評価が低下しており、テキストの授業での扱い方に改善の余地があることが推測された。

- 3) 能力の高いグループと低いグループとに分けて同様の分析をすると、テキスト自体の評価は上位と下位で変わらないが、全体評価については評価が分かれており、主に能力の低い学生が全体評価を低めに付ける傾向が見られた。今後は、『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を日本語の運用力が低めの学習者に用いる際、単なるモデル会話の暗記とその再生練習だけにならぬよう、クラス活動を工夫する必要性が認められた。

4 『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を使用した教師の感想

本章では、2024年11月29日（2024-25年度2学期）に行われたセンター内の勉強会において教員から出た意見を報告する。この勉強会では、1学期に『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を使った各クラスの教員に以下の5項目について質問し、テキストの使われ方や利点、改善を要する点、今後の関連する教材の整備について回答を得た。

- 1) テキストをどのように使ったか
- 2) テキストの利点は何だと思うか
- 3) テキストの改善を要する点は何だと思うか
- 4) テキストにあったほうが良いと思われる補助教材は何だと思うか
- 5) 学生の反応・感想

このうち、5)の「学生の反応・感想」については、3で詳細に報告されたため、本章では割愛する。

それでは、順番に結果を報告したい。

4-1 テキストをどのように使ったか

この質問では、テキストの各セクション（「A やってみよう」「B 基本部分を確認しよう」「C 練習しよう」「D 聞いてみよう」「まとめの練習」「メールを書いてみよう」⁵ 「Let's Challenge!」）の使い方や時間配分について聞いた。センターでは運用力別に9つのクラスがあり、同じ学習期間でもどのユニットまで進めるかはクラスによって異なる。⁶ 上位・中位・下位のグループに分けると、上位のグループほど、授業で取り上げ練習できるユニット数、セクションの量が多いという結果であった。このことは、2で示した表1からも明らかである。

例えば、上位グループの最上位のクラスからは、「A やってみよう」から「D 聞いてみよう」までを授業前に学生に予習させ、授業では学生からの質問に答えた後、「まとめの練習」、「Let's Challenge!」まで行うという形で全ユニットの全セクションを使うことができたという回答を得た。一方、中位のグループでは、「まとめの練習」を中心として練習を行い、適宜「C 練習しよう」「D 聞いてみよう」の内容を振り返ったクラス、「B 基本部分を確認しよう」のモデル会話を踏まえて「C 練習しよう」のみを中心とするクラスがあった。モデル会話の応用的な会話である「D 聞いてみよう」を十分に練習する時間が足りなかつたという声は多く、それは下位のグループでも同様だった。下位のグループのクラスでは、モデル会話を完璧に覚え、同じスタイルのロールプレイ1つを行い、「C 練習しよう」をこなすまで時間いっぱいだったということだった。

また、最上位の1クラスを除いて「Let's Challenge!」の部分はどのクラスも授業で扱う時間がなく、クラスによっては復習の日を設け、そこで触れたという程度だった。

本テキストでは、前年度まで使用していた「新待遇表現」にはなかった重要なポイントの翻訳がついた。そのため、時間の余裕が生まれ練習により時間がかけられると予想していたものの、期待したほどの余裕は生まれなかつたという意見があった。将来的には、運用力のレベルによってどのような練習を省略できるか、どのユニットを軽く扱えるかを提示することや、教師用マニュアルを準備することが必要だという意見が出た。

4-2 テキストの利点

この質問では、テキストの強み、実際に使ってよかつた点などについて聞いた。これについては、「表現のバリエーションが多く、説明も詳しい。メールの例がたくさんある。」「会話の構成まで学べるテキストである点」「（「新待遇表現」の時と比べて）テキストとして1冊にまとまっているので、待遇表現の使用が必要とされるコミュニケーションの場面に遭遇した時、学生が参照しやすい」などの声があった。また、4-1において、時間の関係で「D 聞いてみよう」を扱う余裕がなかつたことに触れたが、「授業で使えなくても「D 聞いてみよう」で日常的な会話のインプットを補うことができる」という意見もあつた。

また、使いやすいと思う点は何かと聞いたところ、分量、構成が揃っていた点、英語の説明があったのでそこに関する質問が出なかつたという点が挙げられた。これは「新待遇表現」と比べて本としての統一感が生まれ、翻訳がついてより学習者が独習しやすくなつたことを示していると判断できる。

4-3 テキストの改善を要する点

最も指摘が多かったのは、「C 練習しよう」の部分であった。本テキストでは「C 練習しよう」と「まとめの練習」の部分が実際に学生が口頭で練習する部分であり、「C 練習

しよう」がすべてのクラスで扱われたため、気がつく点も多かったと思われる。

具体的には、「新待遇表現」と比べて「C 練習しよう」の練習内容が複雑になっているという点が指摘された。「新待遇表現」の時はモデル会話をもとにした単純な代入練習であることが多く、口ならしとして練習できるものが多数あり、また、すべてのユニットに必ずこのような代入練習があるという位置づけではなかった。書籍化に当たり、各ユニットの練習内容を統一するために新たに「C 練習しよう」を作成したユニットもあり、難易度にばらつきが出てしまった感がある。さらに、「C 練習しよう」のフォーマット・レイアウトに関する意見も出た。場面や話し相手が表の形式で示されているユニットと、場面の説明の日本語を読んで会話を作るユニットがあるが、後者の方が練習しやすいという声があった。また、「B 基本部分を確認しよう」のモデル会話が掲載されているページと、「C 練習しよう」のページが異なるので、モデル会話をもとにして「C 練習しよう」を練習するという活動で、ページをまたぐレイアウトが見にくいという意見が出た。

その他には、「B 基本部分を確認しよう」の部分で、複数箇所に現れる丸数字（①、❶など）および囲み数字（①など）が何を表しているかすぐ見つけられないという意見があった。これについては、巻頭の「本テキストの使い方」に少し説明があるものの、実際のページを使って解説した凡例はテキスト中にはないので、テキストのウェブサイトで凡例を公開する必要性を感じた。

4-4 テキストにあったほうが良いと思われる補助教材

最後に、授業で活用するために、今後作成を希望する補助教材について質問した。得られた回答は音声と映像に関するものであった。一つ目は、「まとめの練習」のロールプレイ練習の解答例の音声を希望するというもの、二つ目は、場面設定がわかるように、モデル会話の動画が欲しいというものだった。二つ目に関して、あるクラスでは、学期末の試験として、学生が出演して撮影したロールプレイ動画の提出を課したという報告がなされた。

本テキストは各練習問題の解答例、及び、「B 基本部分を確認しよう」のモデル会話と「D 聞いてみよう」にある全会話の録音が出版社のウェブサイトからダウンロード可能になっている。今後、ウェブ上には、音声や動画、様々な形式の練習問題などがアップロード可能で、ここに別の補助教材を提供することにより学習を支援していくことが期待される。テキストを使用した感想を活かしながら、更に関連する教材を整備していきたい。

おわりに—今後の課題と展望

以上、2024–25年度のレギュラーコースにおいて実際に新テキスト、『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』を活用した教育実践を振り返った。

2で述べられているように、本テキストは様々な学習段階にある学習者を想定している。そのため、テキストの活用の仕方をレベルに応じて工夫する必要がある。しかし、3-4で明らかにされたように、テキスト自体の評価が高くても、「日本語の運用力が低めの学習者」には全体評価が低いという結果となった。また教師から見ても、中位や下位グループでは、「時間に余裕がない」という課題が4-1で挙げられている。このような課題はいかに克服し得るだろうか。

一つにはテキストを扱う範囲をより制限することが考えられる。特に下位グループが「モデル会話の暗記と再生」だけに陥らないよう、様々なクラス活動を取り入れたい。そのためには、4-3で課題として挙げられた「C 練習しよう」をより円滑に行えるような活動シートの作成や、ロールプレイカードの指示文が学習者の言語に翻訳されている補助教材の活用も有効であろう。

また、会話教材であることを考慮すれば、AI技術を駆使し、対話形式の練習が可能となるアプリの開発や、音声で重要ポイントが学習できるような工夫も考えられる。技術を活用することによって、自宅学習時間を増やし、クラスでの実際の会話練習を充実させることも可能であろう。

作成経緯で明らかにされているように、本テキストは、長年センターで取り組んできた「待遇表現」の教育実践を通じて得られた知見を、他の教育機関や独学の学習者でも活用できるよう改訂し一冊の本としてまとめたものである。その過程で、「テキスト」として製本するために削ぎ落とされてしまった部分もかなりある。例えば、重要ポイントの説明や会話文は、なるべく煩雑にならないように最小限にとどめる等の工夫がなされた。そうしたテキストに盛り込めなかった部分を別冊のような形でまとめることも検討していきたい。

待遇表現教育の最終目標は、単に「敬語を正しく使えるようになる」ことではなく、相手との関係や、相手への負担、そして場の特徴に応じて即時に口頭で適切な表現を用いてコミュニケーションがとれるようになることがある。そのため、学習者が、表現の習得にとどまらず、相手や場面への配慮をしながら、コミュニティの中に日本語を通じて自己を位置づけることを支援するための教育実践を今後も模索していきたい。

注

- 1 本報告は、『20の場面で学ぶ敬語コミュニケーション』の編集作業等に直接あたった4名が執筆した。担当部分は以下のとおりである。1, 5:佐藤、2:千田、3:青木、4:加藤
- 2 この章は、2025年11月29日に行われた当センター「勉強会」での各クラスの報告も参考にしてまとめている。
- 3 コース評価の質問項目は以下の通りである。

1. Overall assessment of the course Excellent Good Fair Poor

2. Concerning text materials

Quality	Excellent	Good	Fair	Poor
---------	-----------	------	------	------

Amount	Too much	5	4	3	2	1	Too little
--------	----------	---	---	---	---	---	------------

Difficulty	Too difficult	5	4	3	2	1	Too easy
------------	---------------	---	---	---	---	---	----------

3. Concerning homework

Quality	Excellent	Good	Fair	Poor
---------	-----------	------	------	------

Amount	Too much	5	4	3	2	1	Too little
--------	----------	---	---	---	---	---	------------

4. Course pace Too fast 5 4 3 2 1 Too slow

5. Comments

- 4 2021-22年度は特に高い値となっているが、この年はコロナ禍におけるオンライン授業の年であり、様々な要因から特異な結果となった可能性がある。
- 5 「メールを書いてみよう」の部分は、どのクラスも授業内では内容の質問を受け付けるだけで、実際の書く練習は宿題として行ったため、実質的には「メールを書いてみよう」以外のセクションの学習状況を本章で報告することとなる。
- 6 進度として、各クラス共通して最低ユニット7までは進めることができていた。それ以降の3つのユニットをどこまで進めるかはクラスによって異なり、1学期に全ユニットを終わらせたクラス（上位グループの2クラス）と、別の学期に学習したクラス（7クラス）があった。